

絶対服従!

# 言なり許可証①

お嬢様と調教生活

栗栖ティナ

挿絵: 相音うしお

立ち読み版

何れも  
言うことを  
聞きます。



プロローグ 縮まらない距離

一章 言いなり許可証

二章 『言いなり』の童貞喪失

三章 メイド少女とご主人様レッスン

四章 『言いなり』の告白

五章 素晴らしき許可証生活

エピローグ 有効期限は永久で

## 登場人物紹介

Characters



あんたが脱げって  
命令したんじゃないっ



しちじょうり お  
**七条 莉緒**

日本有数の大企業である七条グループのお嬢様。紀洋とは幼なじみで、彼のことを気になっているものの、素直になることができずに告白できないでいる。

そういうときこそ  
許可証の出番です！



もりみや

**森宮 くるみ**

七条家に代々仕える森宮一族の少女。小さいころからメイドとして七条家で暮らしていて、莉緒や紀洋の幼なじみでもある。

どんなことを命令しても  
いいんだから



しちじょうか な こ  
**七条 可南子**

七条グループの会長を務める莉緒の母親。包容力のある女性で、莉緒と紀洋の仲が上手くいくように応援している。

いざきのりひろ  
**伊崎 紀洋**

階段から落ちた莉緒を守ったお礼として、「言いなり許可証」を手にした少年。

「もう、悪ふざけもいい加減に……ふえっ、きゃああっ！」

業を煮やして力尽くでメイド少女の手を引きはがそうとした莉緒の手が、泡でツルツと滑り落ちてしまった。

タオルで覆い隠された股間。その中央の雄々しいふくらみに手の平がぶつかった。反射的に手を離れたお嬢様だったが、そのときタオルも一緒に掴んでしまう。

「ちよ、何を……うわわっ！」

止める間もなくあらわにされてしまった股間。勢いよくそそり立つ肉幹を肩越しに覗く少女達に見られてしまった。

「え……きゃっ、そ、それ……何……えっ、えええっ!？」

「おおっ……これは……ご立派です、ご主人様」

すっかり動転して言葉にならない莉緒。いつも飄々としてくるみも珍しく言葉を詰まらせて、頬が鮮やかな朱色に染まってしまっていた。

「どうなってるのよ、それ！ な、何で大きく……ううっ、エッチ！」

「仕方ないだろ！ というか、見るな!!」

紀洋は慌てて怒張を両手で覆い隠す。

深呼吸をしてどうにか鎮めようと試みるが、覗き見た少女達の裸体や背中中で味わっている双丘の感触が生み出す欲情はそう簡単には振り払えない。

意識すればするほどピクピクと力強い痙攣が止まらなくなってきた。

「見てない！ そんなの見たくなんてないわよっ……む、昔と全然違う……何なの、その大きさ……ありえない」

そう言いながらもお嬢様は少年の股間にチラチラ視線を向けてくる。

背中に押しつけられている乳房越しに素早く鳴り響く鼓動が伝わってきた。

莉緒が——最愛のお嬢様が自分の屹立を見て昂たかぶっている。

そう考えると興奮はますます燃え上がり、幹が破裂しそうなくらい勃起してしまう。

「どうしてビクビクしてるのよっ！ 早くどうにかして、もう見てられないっ」

「そんなこと言われても……っっていうか、見てられないっっていうなら見るなよ！」

莉緒は紀洋の左肩に顔を埋めて羞恥に悶えながらも、薄目を開けてあらわになった剛直を観察し続けていた。

その視線を意識すればするほど屹立全体がジンジンと強く疼き、勢いを増していく。

「ふむふむ、お嬢様は意外とむっつりなのですね……ふふっ」

そんなやり取りをじっと見ていたメイド少女が面白そうに頬を緩める。

「どういう意味よ、それ！」

「何でもありません。それよりも、今はご主人様のお身体が心配です」

噛みついてくるお嬢様をあっさり受け流したくろみだが、再び泡塗れの右手をそそり立つ肉幹へ近づけてきた。

「もう破裂しちやいそうなくらいパンパンですね。見るからに苦しそうです」

メイド少女はわざとらしいくらい重い口調で呟きながら、人差し指でぷっくりと大きくふくらんだ亀頭を軽く突く。

「うわっ、やめ……んんっ！」

その瞬間、脳天まで響いてきた甘美な快感に紀洋は思わず声を震わせてしまった。

限界まで勃起して快感神経が剥き出しになっているペニスは、そのわずかな刺激にも大げさに反応して大きく震える。

「少し突いただけでこれでは……もうとても我慢できませんよね？ どうしたらいいと思いますか、お嬢様」

「し、知らないわよ！ というか、バカやってないで早く離れなさいってばっ」

「そうですね、くるみもさすがにこれ以上は恥ずかしいですし……」

顔を伏せたまま叫ぶお嬢様の声に従い、メイド少女はゆっくり手を引き——ある程度離れたところで動きを止めた。

「ですが……命令されたらどうしようもありませんね」

くるみはもう片方の手を傍の柵に伸ばし、紀洋がさつきそこに置いた許可証を取った。

「恥ずかしくても……『硬くふくらんだオチンポを綺麗に洗え』と、この『言いなり許可証』で命令されたら、くるみもお嬢様も従わなければいけません」

メイド少女は息を荒くする少年の右耳へ唇を寄せ、小声で囁きながら手に持つ許可証を押しつけてきた。

「待てよ、くるみ。そんな命令、俺は……」

さつき水着を脱げと命令したことも本当によかったのかどうか悩んでいるのだ。

それよりも過激なことを頼む気になんてとてもなれない。

そう訴えようとする紀洋の言葉を制するようにくるみは言葉が続ける。

「でも、お嬢様はご主人様のここに興味がお有りのようですから、満更でもないかもしれませんねえ」

「きよ、興味なんてない、絶対ないわよ！」

小さく笑みを零しながら言うメイドへ訴える莉緒だったが、それでも潤んだ瞳はいきり立つ肉槍の様子をチラチラとうかがっていた。

大好きな女の子が恥じらいながらも自分の剛直を観察している。

その事実が少年の興奮を再び理性では止められないくらい燃え上がらせた。

「実はくるみも……とっっても興味あるんです。恥ずかしくて困っちゃいますけど、でも、命令されたなら……誠心誠意ご奉仕させていただきますよ？」

耳たぶに唇を寄せるメイド少女が囁く声と共に舌を伸ばし、耳の穴をチロリと舐め上げた。その耐えがたいくすぐったさにゾクツと背筋が震え、目の前が真っ白に染まる。

「ここ……俺のチンポも洗ってくれよ！ 二人で一緒に……」

紀洋は無意識のうちに掴まされた許可証を高く掲げて叫んでいた。

「なっ、の、紀洋、あんた正気!! あたしにそんなこと……」

「承りました、ご主人様♪ さあ、お嬢様、もう興味がない振りをする必要ございませんよ。遠慮なく触らせていただきましょう！」

顔を上げて驚きの声を上げる莉緒を満面の笑顔で促すくるみ。

紀洋は対照的な二人の反応を交互に見つめてから、掲げている許可証を一瞥する。

(ま、また使っちゃった……何やってるんだよ、俺)

軽い自己嫌悪が込み上げてきたが、それに浸っている時間はなかった。

「さあ、それはまたこっちに置いておいて。お嬢様、ご主人様の背中に隠れていたらご奉仕しづらいですよ？ こんな風に身体を前に倒してくださいませ」

「ひ、引っ張らないでちょうだいよ！ そんな……やつ、ち、近い!!」

すっかりやる気満々の巨乳メイドに手を引かれたお嬢様が、紀洋の左ふとももにもたれかかってきた。

お椀型の美乳が付け根辺りにのせられ、唇が赤黒い先端に触れてしまいそうなくらい至近距離に顔が寄せられる。

「それではくるみも失礼して♪ あは……本当にご立派です、ご主人様のオチンポ」

同じように、メイド少女も重みでわずかに垂れている巨乳で竿の根元を覆うように身を乗り出してきた。むにゅんと潰れる乳肉の柔らかさと温もりに反応し、垂直にそそり立つ肉槍がビクツと力強く痙攣する。

「くるみ、そ、そんなにジロジロ見るな！」



「命令でしょうか？ でも、今のご主人様は許可証をお持ちでないので従わなくても問題ありませんよね。それに見なければ綺麗に洗えませんし」

少年の抗議をあつさり受け流したくるみが、そう言いながら右手で雁首の真下辺りを優しく握り締めた。

伝わってくる柔らかな温もりとわずかな圧迫感。刺激に飢えていた屹立は歓喜を訴えるように震えながらさらに一回り大きくふくらんでいく。

「凄い、まだ大きくなるんですね。ほら、お嬢様も早くなさってください。それとも七条家から追放されたいのですか？」

「……わかったわよ！ の、紀洋のド変態!! 後で覚えておきなさいよ……」  
はしゃぐるみに促された莉緒は、そう毒づきながらも左手で剛直の根元を掴む。

緊張しているせいかかなり強い力が込められていて、尿道が潰れて塞がってしまうのではないかと思うくらい圧迫される。

「あぐっ……そんなに強く握らないでくれよ！ もっと優しく……うわあ」  
紀洋はお腹の奥がキュッと締めつけられるような苦しさに顔を歪めながら、加減を知らないお嬢様に訴える。

「わかったわよ。鉄みたいにかチカチなんだから、少しくらい強く握っても潰れたりしないでしょう？ 大げさね……」

紀洋のほうを振り返ることもなく、顔のすぐ傍にある亀頭を凝視したまま答える莉緒。

竿肌に食い込む指の力が緩んで程よい圧迫に変わると、今まで感じていた息苦しさが蕩けそうな疼きにすり替わった。

「傍で見ると結構グロテスクね。血管が浮いてゴツゴツしてるし……小さい頃はあたしの指くらいの大きさだったのに、今は腕くらい……」

「はあ……んっ、う、腕は大げさだろ」

恥ずかしそうに目を伏せながらも観察をやめようとしなない莉緒。

その舐めるような熱い視線に竿肌の火照りが増し、甘い痺れが強くなる。

時々先端に吹きかかる吐息の刺激だけで意識が吹き飛びそう。

自分で慰めるときではありえない感じ方。大好きな女の子に触れられる悦びに抗うことなどできず、もう何も言えずにただ身を委ねるしかなかった。

このままでも十分満足だ。奉仕を受ける当人はそう思っているのだが、する側はまだまだ物足りないようだった。

「お嬢様、見ているだけでは綺麗にできませんよ？」

「うっ……じゃあ、どうするのよ。こ、擦ればいいの？」

すっかり見入っていた莉緒は、呆れ顔のくるみのほうに問い返す。

「基本的にはそうですね、それだけでは物足りません。まずはくるみがお手本を見せま

すのでよく見てみてくださいませ」  
そう言って微笑むメイド少女がおもむろにその細い指を動かし始めた。

まるで生き物みたいに張り詰めた竿肌を這うそれが、傘の裏や亀頭、そして裏筋のほうにまで伸びてくる。

「くるみ、そこは……うおっ、ああっ！」

雁首を強く弾かれたと思つたら、先端から竿の中段まで裏筋をなぞられる。

息つく間もなくヒクヒクと小さく震える鈴口を人差し指の先で強く突かれ、強烈な快感が竿の芯を走つた。

「殿方の敏感な場所なので、こうして優しく……くすぐるみたいにいじめてあげてお勧めします。ふふっ、とても素敵な反応をしてくださいますねえ〜」

快感に悶え震える剛直を無邪気に笑いながら見つめるくるみ。

その天真爛漫な姿とは裏腹の巧みな指使いに、紀洋は何度か深呼吸をして息を整えなければ声も出せないくらい追い詰められてしまつていた。

「はあっ、くふっ、ああっ、くるみ……ど、どうしてそんな……上手……んあっ」

「そ、そうよ！　くるみ、どこで勉強したのよ？　まさか、その……」

喘ぎながら問いかける少年に続き、そのお手本に目を丸くしていた莉緒も叫ぶ。

「ご主人様へご奉仕するのはメイドの務めですから。いつかこの日が訪れることを夢に見て、毎日練習してただけですよ」

「どんな練習してたんだよ……くっ、そ、そこ……おおっ」

親指で先端を強く押されながら、残りの指で裏筋や雁首の裏をくすぐられる。

甘美な疼きが繰り返し弾け、目の前で火花が散るような快感に幹竿が戦慄わなないた。

「あは、お汁が出てきましたね。これではいくら洗っても綺麗にならないですねえ」

押し広げられた穴口から滲む先走りのカウパー腺液。メイド少女はそこに当てていた親指をゆっくりと離し、見せつけるように透明の糸を引く。

「この匂い……何？ 生臭くて……でも、何だか……」

「これが殿方の発情した匂いですよ、お嬢様。くるみも実際に嗅ぐの初めてですけど……んふっ、不思議ですね。いい匂いではないのに、何だか癖になります」

クチュ……ニチュリ……。

うっとり甘い吐息を漏らすメイド少女は、雄汁で濡れた穴口へ親指を押しつけたり離したりを繰り返し、卑猥な水音を鳴り響かせる。

濃くなってきた独特の匂いを、奉仕する少女達は小さく鼻を鳴らして堪能していた。

自分のペニスで昂り上気した二人の顔を見ると、それだけで言い知れぬ悦びがお腹の奥から沸き上がる。

「あはっ、ご主人様のオチンポが切なそうに震えています。お嬢様、そろそろ見ているだけではなくて手伝っていただけませんか？」

「で、でも、あたし……その……」

まるでピアノでも奏でるような優雅な指使いで剛直の先端を弄ぶくるみ。

一方で呼びかけられた莉緒は竿の根元を恐る恐る握ったまま、それ以上は何もすること

ができず身体を強張らせるだけだった。

「ご主人様もくるみだけじゃなくて、お嬢様にも奉仕してもらいたいですよね？ この期に及んで遠慮は無用です。往生際の悪いツンデレ女にもう一度ご命令を！」

ノリノリのメイド少女が棚に置かれている許可証を指差す。

（この期に及んで……か。そうだよな、もうここまでしちやっってるんだし……）

後で怒られるのは間違いない。

それなら思うままに楽しみたいという衝動を抑えることができなかった。

「莉緒……握ってるだけじゃなくて、掴んだまま扱しいてよ。思いきり激しく……」

紀洋はくるみを真似て棚の許可証を指差して命じる。

「うっ……わ、わかったわよ。後で覚えておきなさいよ……変態っ」

振り返るお嬢様はジト目で睨んできたが、それでも強く抵抗することはなくすぐに頷き返してきた。

気持ちに踏ん切りをつけるように双乳を悩ましく揺らしながら大きく深く息を吐いた直後、竿の根元を掴む手を上下に動かし始める。

ニチュリッ……グチュツ、又チュツ……。

「そ、そう。そんな風に擦って……もつと……うわっ、ああっ」

手の平に塗られたボディソープと先端から裏筋を伝って垂れてくるカウパー腺液が混ざりあう音を鳴り響かせ、はち切れんばかりにふくらんだ竿肌が撫で擦られる。

先っぽを弄るメイド少女の焦らすような動きとは違う、ストレートな快感を与えてくれる奉仕。根元に込み上げてきている熱いモノが少しずつ尿道へ押し上げられていくような感覚に合わせて我慢できず背筋をくねらせてしまう。

「どんどん熱くなつて……んふっ、はあはあ、匂いも濃くなつてきたわね」

「お嬢様がなかなかお上手だから、ご主人様のオチンポがとつても喜んでいらつしやいます。その調子で……んふっ、ほら、ここ……タマのほうも弄つてみるといいですよ」

笑顔で褒めるくるみがそう言いながら軽く上体を左右に揺らす。

ちよūdō竿の根元をメロンサイズの巨乳が擦る形になり、陰囊に包まれている片方の辜丸が軽く弾かれた。

「こ、こもするの？ コロコロしてて、ちよつと可愛いかも……」

それを見た莉緒も上体を今までより大きく倒し、お椀型の美乳の頂点を陰囊の辺りへ押しつけてきた。

少女の昂りを表すようにツンと尖った苺色の肉粒。コリコリと程よい硬さのそこに皺だらけの陰囊が軽く押される。

「うわあつ、はあ、ああ！ イッ……それ、反則だつて……おおつ」

見ているだけで限界まで勃起してしまった魅力的な肉球に急所を刺激されている。

ふとももや付け根の辺りもしっとり滑らかな乳肌を撫でられ、下腹部が少しずつ蕩けていくような恍惚の気持ちよさだ。

それに――。

(……二人とも凄くドキドキしてる)

その豊かな肉球越しに伝わってくる、それぞれの高鳴る鼓動の音。

自分と同じように彼女達もこの淫靡な雰囲気酔って興奮している。

そう思うとこんなお願いをってしまった罪悪感も薄れ、純粹にこの恍惚の快感に身を委ねることができた。

「いいよ、もつと激しく……俺、もう……くうっ、おおおっ!!」

息が弥が上に荒くなり、剛直は限界を訴えるように力強く脈動を繰り返す。

「何よ、これ……ビクビクして止まらなくなってるじゃない」

「そろそろ限界みたいですねえ。このまま続けていたら、ご主人様の真つ白なお汁がくるみ達の手やお顔にかかってしまうかも？ それはちよつと困りますけど……でも、命令されたら断れませんよね」

くるみは上目遣いで紀洋を見つめながら、親指と人差し指で作った輪に張り出した肉傘を引っかけて執拗に弾き始めた。

声も出せないくらいの強烈な快感が背筋を駆け上り、根元に溜まっている熱いモノを今すぐ吐き出してしまいたい衝動を我慢できなくなる。

「はあはあ……んうっ、よくわからないけど、く、苦しいんでしょう、紀洋。だったら、今更遠慮して我慢しなくてもいいじゃない。どうせ逆らえないんだし……早くすつきりし

ちやいなさいよ。ほら……してあげるから、いっぱい」

甘ったるい吐息を零すお嬢様も、そんな少年を煽るように手の動きを速める。

笋肌にしつかりと五本の指を食い込ませ、グチュグチュと淫らな水音を立てて扱く。

荒々しい摩擦の熱が芯まで伝わってきて、もう少女達の手や双乳の中で火に炙られたバターのごとく溶けてしまいそうだ。

「ご主人様、いかがなさいますか？ このまま……くるみ達の手で気持ちよくなってしまいますか？ 射精……なさいます？」

「焦らさないで、早く命令しちやいなさい……こ、こんな苦しそうに震えてるの見せられたら……あふつ、あたし……あはあつ、もうつ、あんんつ」

悪戯っぽい笑みで煽ってくるメイド少女と、少年の昂りが移ったかのように声を上擦らせて熱心に手を動かすお嬢様。

二人の甘い声に理性の糸は容易く断ち切られ、紀洋は最後の力を振り絞って再び柵に置かれている『言いなり許可証』を指差した。

「して……そのまま思いつきりチンポ扱いて！ しゃ、射精させてくれ」

「承りました、ご主人様。んっ……このままくるみの手の中でご遠慮なく射精してくださいませ。オチンポの先からドロドロのお汁出してえ……」

「いいわよ。扱く……もつと激しく。いっぱい……紀洋のオチンチン……大きなオチンチン扱くわ。だから、射精しなさい。あたしの手で気持ちよくなつて！」





クチュウツ、ニチュリツ……ヌチュツ。

可南子の腰使いに合わせ、ヒダの隙間まで愛液に塗れた肉裂と剛直が擦れる。

手の平はもちろん口内粘膜ともまた違う、もつと熱くてぬめりのある感触。

本当に幹胴が少しずつ舐め溶かされていくような恍惚の快感だ。

「可南子さん、これ……すごっ……き、気持ちいい。よすぎるよっ……俺、こんなの我慢できない……で、出るっ、すぐに落ちちゃう！」

「はあはあっ、私もおっ……オチンポ、とつても熱くて硬くてえ……オマ○コ、グチュグチュ擦ってもらっただけで感じるうっ♪ あはあっ、いいのかしら、このまま続けて……息子みたいなノリくんのオチンポ、オマ○コ摩擦で射精させていい？」

踊るように腰を振り続けながら、可南子が悪戯っぽく尋ねる。

あえて背徳感を煽るような言い回しをしたようだが、もう込み上げてくる甘美感に身も心も蕩けた紀洋はそんなことで止まりはしなかった。

「いいっ、射精……させて！ このまま素股で……可南子さんのオマ○コでチンポ舐められながら、いっぱい射精したい……せ、精液出すっ、出したいっ!!」

少年は震える手でしっかり許可証を握り締めたまま、腰上の淑女に訴えた。

「ええ、わかったわ。許可証で命令されたら断れないからあ……あはっ、はあ、このまま動くわ……ノリくんがいっぱい精液ビュルビュルするまで腰振っちゃうのおっ♪」  
嬉しそうに唇を緩めた可南子は小さく頷くや否や、腰使いにスパートをかける。

グツチュツ、ニチュルウツ、グチュウツ!

肉粘膜と竿肌が荒々しく擦れ、愛液の飛沫しぶきが辺りに散る。

透明の熱汁塗れになったペニスペニスは射精の近づきを訴えるように痙攣を始め、既に先端からは先走りのカウパー腺液がダラダラと滴っていた。

「出るっ、俺っ、もうダメっ、あぁっ、イッ……イク、イクよっ!!」

「ええ、きてえっ。ノリくんのオチンポから熱いお汁出るところ、私に見せて!」

紀洋の上擦る甘声に合わせ、可南子はそのむっちりとしたヒップをふとももに押しつけんばかりに腰を落としてきた。

綻ぶ割れ目に幹竿が深く食い込み、そのまま強く締めつけられる。

裏筋側に表皮が引つ張れ、その刺激で我慢の糸が断ち切られてしまった。

「出るっ、イイツ……ふぁっ、うわぁあぁっ!!」

ドクドクドクウツ、ビュブウツ、ビュブブブッ!

悲鳴のような嬌声に合わせて鈴口が開き、そこから盛大に白濁液が迸る。

幹胴が力強く脈打つ度に熱液が淑女の股やふともも、少年の胸板に飛び散っていく。

「あらあら、凄い量。今朝もあんなにたくさん出してくれたのに……若いわね」

「はぁはぁ、だ、だっ……こんな……気持ちよくて……」

母娘の口奉仕も夢見心地の心地よさだったが、秘裂に舐めしゃぶられる快感はそれをさらに上回る素晴らしさだ。

剛直はもちろん下半身全体が蕩けてしまいそう。絶頂の波もなかなか引かず、射精が止まっても勃起が鎮まることはなかった。

むしろまだ物足りないと言わんばかりに力強い痙攣を繰り返している。

「あふうっ、いいわ、これ。オチンポの震えが伝わってきて……ダメ……欲しくなってオマ○コの入口開いちゃうっ。このオチンポの女になる準備始めちゃいそうだわ♪」  
浸るよううっとりとした声に合わせ、肉唇が悩ましく震える。

奥から溢れる蜜液の量が増え、剛直に付着した射精の残滓が洗い流されていく。

「可南子さん……あ、あの……」

「ノリくんのオチンポも全然萎えないわね。どうでしょうか？ 私はノリくんのお母さんみたいなものだし、それに莉緒の母親だから……これ以上はいけないことよね」

わざとらしく天を仰いで悩む素振りを見せる可南子だったが、そう呟いている間も腰をゆつたりと前後に振り、濡れ蠢く割れ目を幹竿に擦りつけてきていた。

滴る愛液と付着した白濁が竿肌と媚粘膜の間でグチュリと混ざりあい、その焼けるように熱い淫汁が糊のように心地よい密着感を強くしてくれる。

「ひぐうっ！ ふあっ、あ、で、でも……」

射精の余韻が引く間もなく与えられる快感に、理性が焼け切れてしまいそう。

淑女が言うことはもつともだが、もうそんな理由では昂りを止められそうにない。

もどかしさに耐えられず潤んでしまった瞳で見つめていると、焦らすような腰振りを続

ける可南子が小声で囁きかけてきた。

「でも……いけないことでも、その許可証で命令されたら断れないわね」

「許可証……で、でも……」

「こないけないことでも堂々と命令できるくらいの勇気があれば、莉緒に告白するくらい簡単じゃないかしら」

焦らすように腰振りの速度を落とすつつ、言いよどむ少年をうつとり見つめる淑女。

早く命令して欲しい。彼女も狂おしい衝動を必死に我慢していると伝わってくる。

「可南子さん、お、俺……もうっ」

グチャグチャと愛液と白濁が混ざりあう淫音を響かせながら擦れあう性器同士。

このまま蕩けて一つになってしまいたいような恍惚の快感に理性が打ち砕かれていく。

こんなに美しい淑女がこうして自分を『特訓』しようとしてくれているのだ。

それに答えないのは失礼なことだし、ここで男らしくリードできなければ彼女が言うとおり愛しい幼なじみとの関係を進展させることなどできない。

(いいんだよな、だから。これ……使っても)

衝動に耐えかねて自分を正当化する理由を心の中でいくつも並べた少年は、意を決して手に持った許可証を可南子の前に突き出した。

「い、入りたいです。俺、このまま可南子さんの中……オマ○コに入れさせて！」

「ふふっ、ノリくん、こういうことは初めてでしょう？ 私が相手でもいいの？」

「可南子さんとしたいです！　だから……」

「ええ。命令だもの……いけないことでもやらないとダメね♪」

紀洋の言葉を最後まで待つことなく、楽しそうに微笑む淑女が軽く腰を浮かせた。

泡立った淫液の糸を引きながら肉唇から離れ、お腹側に押し倒されていた屹立がピンツと勢いよく立ち上がった。——その瞬間。

ヌチュルウウツ、ズップウツ、ズリユルルルツ！

「んふうつ、イイツ……はあ、入ってくるつ、ノリくんが私の中にい!!」

可南子が腰を落とす、淫裂の中央——蜜を滴らせる膣穴に肉槍が飲み込まれた。

「うわっ、いきなり!?　あぐっ、これ……あ、熱い」

膣内は想像していた以上に窮屈で、幹竿が押し潰されてしまいそうな圧迫感だ。

壁面は溢れ出てきているものよりもさらにねっとりとした愛液に塗れ、早く奥まで届いて欲しいと言わんばかりに波打っている。

「あはっ、し、しちゃったあ……子供の頃から息子みたいに思ってた男の子の童貞、本当にもらっちゃった……嬉しいっ。きて、もつと奥……し、子宮までオチンポきてえ」

可南子は柔らかなヒップを少年の腰に擦りつけ、挑発するように甘声を上げる。

座り込んだ反動で、爆乳が悶える少年を煽るようにプルプルと悩ましく揺れていた。

「可南子さん、これ……き、気持ちいい。感じすぎるよお……」

「ええ、私も……ノリくんのオチンポ大きいから、オマ○コがいっぱい。んふっ、はあ、

子宮が押し上げられて……うっとりしちゃうわ」

息絶え絶えに訴える紀洋を見下ろしながら、うっとり快感に浸る淑女。

根元まで埋まっているペニスが震える膈壁に休みなくしゃぶられ、キュッと嘯むように締まる穴口に根元を捕らわれる。

股間だけが熱い湯船に浸かっているような恍惚の快感。息を吐く度に目の前で小さな火花が弾け、耐えがたい射精衝動に背筋が震えてしまう。

「あはっ、オチンポが元気に暴れてる♪」

「だ、だって、こんな……はあはあっ」

昨日から様々な奉仕を味わってきたが、膈内に包み込まれる感触は手や口でもらうのとはまた別次元の心地よさだ。

張りつく肉壁が蠢く度に、刻み込まれている深い皺と竿肌が強く擦れる。

キュッと断続的に締めつけられる快感と混ざり、もう気が遠のいてきてしまう。

この至福のときをすぐ終わらせたくはない。そんな思いに励まされ、歯を食い縛ってどうにか絶頂を堪えていた。

（入れただけでこんなに気持ちいいなら……動いたらどうなるんだろう）

既に腰が痺れてしまっていて、自分から突き上げることはできそうにない。

きっとリードしてくれるだろうと思って淑女の動きを待つが、肉付きのいいヒップはいつまでも腰やふとももの辺りに密着したままで離れる気配がなかった。

「うぐっ、はぁ……可南子さん？ あ、あの……」

息絶え絶えになりながら繋がっている美淑女に声をかける。

入れただけですぐ吐精してしまう、そんな情けない姿を見せろというのだろうか。

潤んだ瞳で問いかける少年に、可南子は小首を傾げて微笑んだ。

「命令どおりにノリくんの童貞もらっちゃったけど、この後はどうすればいいの？」

「えっ、ど、どうすればって……その……」

「ふふっ、だって……本当はしちゃいけないことですもの。命令されない限り、自分からは動いたりできないわ」

悪戯っぽい声で答える声に合わせて膣圧が強くなってきた。

肉竿が一回り小さくなってしまいそうなくらい潰され、尿道に残っていた精液の残滓が鈴口からじわじわ溢れてしまう。

「まだまだ射精したいってビクビクしてるわね。このままオマ○コでいっぱい扱いてあげたら、さつきよりもたくさん出てしまいそう」

「は、はい。だから、その……あぐうっ、うう……」

「遠慮しないで命令してみなさい。これも練習だから……ね？ ノリくんが一人前の男になった証明に……私を好きに使うって気持ちよくなって！」

上擦る声に合わせて膣壁の痙攣も激しくなり、竿肌の表面が蕩けそうなくらい激しく舐められる。結合部から溢れ出てくる愛蜜の甘酸っぱい匂いも濃くなり、それを嗅いでいる



だけで頭がクラクラしてきてしまった。

「じゃあ、こ、腰振ってください。俺のチンポ、オマ○コで扱いて欲しいです！」

練習なんだから遠慮なく使わなければいけない。

そう自分に言い訳をしながら、紀洋は手に持った許可証を突き出して自分の初体験の相手となった淑女に命令する。

「わかったわ。んふっ、命令してくれて嬉しいっ。私も動きたかったの……もつとこのたくましいオチンポ、いっぱい感じたかったからあ！」

歓喜の声を上げた可南子が、今まで我慢していた分を一気にぶちまけるような勢いで腰を上下に振り動かし始めた。

グチュルウツ、ズチュウ、又チュツ！

「そうっ、動いてください。このまま激しく……いっぱいっ！」

「あひっ、はあ、いいわよ。んふうっ、このままあ……オマ○コがノリくんのオチンポの形覚えるまでいっぱい動く……じゅぼじゅぼ食べちゃうのっ!!」

濡れた腔粘膜と肉槍が荒々しく擦れ、結合部から愛液の飛沫と淫音が漏れる。

壁面に食い込んだ雁首がそこを捲るように擦り、龟头全体がジンジンと強く痺れた。

その摩擦でより火照った粘膜が出入りを繰り返す幹胴に絡みつき、本当に中で少しずつ溶けていっているのではないかと思うほどの甘美な疼きが止まらない。

「凄いですよ、可南子さん！ これ、き、気持ちよすぎるっ」

「はあはあ、そう？ んうっ、でも、このままだ動くだけじゃ少し物足りないんじゃないかしら。もっともっと命令してもらえれば……んふっ、くはあっ」

息絶え絶えの少年を、長いサイドテールを振り乱しながら腰を動かす淑女が促す。

「もっと……命令……？」

何を命令するか決めないまま反射的に許可証を掴む右手を挙げた紀洋は、可南子の激しい腰振りダンスに合わせて動く爆乳に気づいた。

ぶるんっ、たぶんっ。そんな音を響かせ、頂点を飾る桜色の突起で縦の軌跡を描きながら揺れる双丘。その迫力満点の光景をもっと楽しみたい。

「もっともっと、おっぱいがエッチに揺れるような動きにしてください。ただ縦に動くだけじゃなくて、背中くねらせたり、お尻を振ったり……」

「はんうっ、はあ、ふふっ……ノリくんたらおっぱい好きなのね。いつも、何かあるとすぐにここ見てるの気づいてたけどお……はふっ、んんっ！」

「だ、だって、可南子さんのおっぱい、凄く大きくて綺麗だから……」

「褒めてくれて嬉しい……んうっ、そんなこと言われたら……命令された以上にエッチなダンス踊りたくなるっ、おっぱい見てもらいたくなっちゃうわ！」

少年の命令に大きく頷いた可南子は、腰を回したり左右に振ったりと動きに大きな変化を加え始めた。

縦に揺れるだけだった爆乳もそれに合わせて、むにゆりと柔らかく弾んで形を変えつつ

大きく円を描くように揺れる。

「うわ……おっぱい、凄く弾んでる。ンッ……甘い匂いもしてきて……あの、さ、触ってもいいですか？ いや、触らせて……おっぱい揉ませてください！」

その動きに欲情をそらされた少年は命令するなり許可証を横に放り捨て、空いた右手で弾み揺れる乳房を鷲掴みにした。

ちよつと力を入れただけで指はズブズブと深く沈み、柔軟に形を変える。

いつまでも捏ね回していたくなる極上の揉み心地だ。

「あふっ、んんっ、そこっ、お、おっぱいそんなに揉まれたら……はひっ、んん！ ダメ……私、そこ弱い、敏感なのっ!!」

今まで息を切らしながらもある程度の余裕を持ってリードしてくれていた可南子が、初めて切羽詰まった嬌声を上げた。

じゅわつと膣壁からまた大量の蜜が滴り、滝のように穴口から溢れてくる。

強く引つかかるような肉壺と剛直の摩擦が滑らかなものに変わってきた。

「俺も感じます、可南子さん！ これ……イイツ……中でチンポ蕩けるっ」

そう震える声で訴えながら、紀洋は我慢できず自ら腰を突き上げる。

愛液の潤滑油に助けられて勢いよく奥深くに龟头を打ちつけ、その反動で素早く雁首が膣口に引つかかる辺りまで引き抜く。

「くふあつ、はあ、お、おっぱい揉みながら動くのダメよおっ、そんなに激しくされたら

……我慢できなくなっちゃう！ 私もお……イッ……イク、イキたくなるうっ」

「一緒に……一緒がいいです！ このまま可南子さんと一緒に感じたっ！！」  
息を切らす淑女に答えながら、紀洋は腰使いにスパートをかけた。

じゅぶじゅぶとねっとり幹竿に絡みつく膣壁を擦り、色気漂うガーターベルトとTバックに飾られた尻房にパンツと勢いよく腰を打ちつける。

「イッ、あふっ、そこおっ！ いっぱい打つてえっ、お尻叩きながらオチンポ奥までぶち込んでっ、んっ！ 私も動く……頑張るからっ」

小さい頃から自分を見守ってくれていたエメラルドグリーンの美しい瞳が潤み、だらしなく緩んだ唇の端からは一筋の涎よだれも垂れてきている。

自分との行為でこんなにも蕩けてくれている淑女の姿に、紀洋は言い知れぬ悦びと興奮で頭の中が埋め尽くされてしまった。

ただ竿の根元に込み上げてきている熱いものをぶちまけたい。その一心で締まる肉道を強引に突き広げ、挿んだ乳房を力任せに揉み潰す。頂点でツンツと尖る乳首を指の間で挟んで転がすと、息絶え絶えの可南子が大きく背筋を仰け反らせた。

「ひぐっ、くうう！ もうっ、イッ……イッちやうっ。ノ、ノリくんも一緒に……もうオチンポビクビクして、我慢できないって言ってるわっ」

「は、はい。でも、その……んっ」

頭の片隅に辛うじて残っていた理性の欠片が、このまま射精するのはさすがにまずいの

ではないかと絶頂を引き留めていた。

そんな悩みを見抜いたように、蕩け顔の淑女が甘く誘いかけてくる。

「いいのよ。今の私はあ……この七条家の人間はみんなノリくんの言いなりなんだから。どんないけないことでも遠慮なく命令して！ いっぱいしてえっ」

声に合わせて可南子は紀洋のふとももの上でヒップを勢いよく弾ませる。

ペニスの先っぽが膣口から離れるかどうかというところまで腰を浮かせ、その直後、ストンと勢いよく座ってきた。

ズリユウウウツ、ズチユツ、ズブズブツ！

一秒たりとも離したくないと言わんばかりに蠢く肉皺をかき分けて進む剛直が、行き止まりの肉室に先っぽが埋まってしまふような強さで衝突する。

敏感な亀頭が子宮口に締めつけられ、吸われているような強烈な快感。全身が戦慄いてもう込み上げるものを抑えられなかった。

「だ、出したい……このまま中に出します！ 出せてくださいっ!!」

「きてえ、そのまま中につ、私の中にノリくんの熱いのビュルビュル出してっ」

投げ置いた許可証を拾う間もなく訴えた紀洋に、可南子が歓喜の声で答える。

同時に膣内がギュッと力強く締めまり、激しい摩擦で蕩けきっていた剛直にダメ押しの刺激が与えられた。

根元に押し止めていた熱い感触が、幹胴を圧迫されたことで尿道のほうへ昇ってくるの

を我慢できない。紀洋はより深い快感を味わいたい一心で、痺れて感覚がなくなっている腰を必死に突き出して膣奥にめり込ませた。

「だ、出します！ ここっ、可南子さんの子宮に射精するっ、くううっ！」

「ええ、きてえっ！ オチンポたくさんビクビクさせて、私の子宮にきてええっ！」

ドップウ、ドブブブッ、ビクウウウッ、ビュルッ、ビュビュビュウ！

淑女の甘ったるい叫び声を聞き、意識が吹き飛びそうな狂おしい官能に浸りながら、紀洋は込み上げてきた白濁を遠慮なく吐き出ししていく。

「イー、きてるっ!! ノリくんの精液、ほお、本当に私の子宮にいつぱいかかってえ……しゅごおっ、イク、もおっ、イツ、イクッ、イクウッ」

締めつけてくる膣壁を押し返すように幹竿がふくらみ、盛大に迸る精液。

ピチャピチャと子宮を打たれる感覚に酔いしれた淑女は、激しく背中をくねらせながら絶頂に達していた。

振り乱す長いサイドテールと揺れる乳房から甘ったるい汗の香りが振りまかれ、それが射精の余韻に浸っている紀洋の鼻孔をくすぐる。

普段よりも濃いその香りはこの美女が達した証。自分を小さい頃から見守ってくれてい  
た人をちゃんと満足させられたという誇らしい思いが胸に込み上げてきた。

「ふふっ、いつぱい出たわね。んっ……中から溢れちゃうくらい♪」

荒く息を切らして言いながら、可南子はまだ腰を動かし続けていた。



寝起きが悪いこの恋人を起こしにいったとき、明らかに自分の夢を見ているとわかる寝言を聞いたことは何度もあった。

どうやら自分が想像していたよりもずっと過激で、甘い夢ばかり見ていたらしい。

「うう……は、恥ずかしすぎ……ゆ、夢のことまで素直に言わなきゃいけないなんて」  
目を硬く瞑ったまま、莉緒が抑えきれない羞恥を訴える。

だが、決して嫌がっているわけではない。

亀頭に吸いつく行き止まりの念膜がヒクヒクと悩ましく蠢き、幹竿を包む腔粘膜の動きが活発になつてきている。

「やっぱり恥ずかしいと感じちゃうんだな、莉緒は。……可愛いよ、凄く」

「だって……んぐっ、ちゅっ、ふあむっ、んん！ のおっ、紀洋……あむうっ」

お嬢様の言い訳を遮って唇を重ねる。

まださっきの余韻で濡れているそこを隅々まで塞ぎ、くすぐるように舌先で舐めくすぐりながら隙間を縫って口内へ差し込む。

「んふっ、はむっ、ちゅっ……はあはあ、しゅきい……紀洋おっ」

「俺も好きだよ、莉緒。んっ、ちゅっ、ちゅぱっ」

怪我をしていない右手だけで少女の頭を抱き寄せ、想いを囁きながら舌を絡める。

ピチャピチャと唾液を分かちあう淫音が部屋に響き、その音が大きくなつてくると亀頭を吸いしゃぶる腔奥の動きも活発になつてきた。



「んぐっ、はあ、莉緒のおマ○コ……だいぶ慣れてきたかな。チンポの先っぱ、思いつきり吸われてる」

「はあはあ、ちゅっ……だつて、これ……んぐっ、キ、キス……してると……ちゅぱ、んんっ、はあ、じゅるっ……ふあああっ」

弱々しく訴える莉緒の声が途中で止まり、代わりに絡みつく舌が少年の口内へ入り込んできた。頬の内側や前歯の裏を狂おしく舐めくすぐられ、甘酸っぱい柑橘類の香りがいっぱいに広がる。

思わずその動きに身を委ねて浸りたくなつたが、思い直して組み伏せるお嬢様の顔を改めて真っ直ぐ見下ろす。

「莉緒……目を開けて。俺の顔を見ながら……続きを話してよ、隠さないで」

「んふっ、はあはあ、そ、そんな……ううっ、だつて……ちゅっ、んっ、気が早すぎるって呆れられちゃうかもしれない……からっ、んふ、ちゅぱ」

「絶対にそんなこと思わない。だから……な？」

今まで以上に恥ずかしい本音を隠しているのだろう。なかなか言い出そうとしない恋人の蕩けた目を見つめながら促す。

甘えるようなキスを繰り返しながら悩んでいたお嬢様は、それでも命令に逆らえないと覚悟を決めたのかようやくよく続きを語り出した。

「紀洋とキスしていると、もっと欲しくなっちゃう。紀洋のものにしてもらえた証……の、

紀洋の……赤ちゃん欲しくて、子宮がキュンキュン疼くの止められないよお」

少年が想像していた以上の甘いおねだりを訴えるお嬢様。

声に合わせて亀頭をしゃぶる子宮口の動きも激しくなり、もつと奥まで啜えたいと言わんばかりに膣壁の痙攣も激しさを増す。

「赤ちゃんか……んちゅつ、そ、そうだな、莉緒と俺の赤ちゃん……欲しいよな」

想いを伝えたその日に言うのは気が早いかもしれないが、こんなにか愛らしい恥じらいの表情で求められると気持ち盛り上がって止められない。

「紀洋、もう痛いの大丈夫よ。だから……くふつ、はあ、はあ、動いて。私のオマ○コと子宮にオチンチン感じさせて……」

ダメ押しのおねだりの言葉で理性の糸が完全に断ち切られた。

隙間なく肉槍を包んでくれている膣道を思いきりかき混ぜ、自分の証を刻み込み、胎内に証を宿したい。

「動くよ、莉緒。思いつきり感じて……っ！」

その衝動に腰を押され、紀洋は遠慮なく力強い抽送を始めた。

又チュツ、クチュリユツ、ズツプウツ！

「ひぐつ、ふああ、あひいいいっ！ そおつ、うう、動いてっ、熱うっ……んんっ、中、ジンジン響いて……凄く熱いいっ、あはあつ、んふううっ♪」

ヒダの少ない膣粘膜に雁首を食い込ませ、少しずつ削り広げるように擦る。

傘の裏側が窄む穴口に引つかかるところまで抜くと、同時に搔き出される赤く染まった淫液が盛大に飛び散った。

純潔を突き破ったばかりの肉道には強烈すぎるのではないかと心配だったが、悶え喘ぐお嬢様の表情に苦痛の色は見えない。

「本当にもう感じちゃってるんだな。何か……嬉しいよ！」

「はふっ、いっ、痛いのかもしれないけどおっ……もおっ、お腹の奥……子宮から気持ちいい波がいつぱい響いてえっ、あはあああっ」

行き止まりをズンッと強く突く度に、お嬢様の嬌声は高く跳ね上がる。

サイドテールにまとめている左右の髪が大きく揺れ、汗ばむ額に前髪が張りついて艶めかしい雰囲気醸し出す。

綻ぶ唇からは絶え間なく熱い吐息が零れ、真っ赤に染まった頬は緩みっぱなしだ。

「感じて……莉緒、もっともっと……どうすれば気持ちよくなるか、俺に遠慮なくおねだりしてくれ。これも命令だっ！俺、感じまくる莉緒が見たいっ!!」

「うん、すうっ、すりゅっ……おねだりいっ、んひいっ、はあ、おっぱい……おっぱいもまた揉んでえっ、ここ……ギユッて……くふっ、ああっ」

投げ置いた許可証を拾い上げる間も惜しんで命令した少年へ、快楽に酔ったお嬢様は間髪を容れずに答えた。

抽送に合わせて揺れる双丘、ふくらむ乳首が上下に桜色の軌跡を描いて誘っているそこ

を遠慮なく右手で鷺掴みにした。

強い弾力に負けないよう力いっぱい指を食い込ませ、やや細長く揉み潰した乳肉を抜くように揉み擦る。

「くふっ、んううっ……イイツ、の、紀洋……あたしのおっぱい、どう？ 触ってて気持ちいいっ……はひっ、みい、魅力的って思ってくれる？」

「当たり前だろ、形も触り心地も最高で、莉緒に頼まれなくてもずっとこうしていたいくらいだよ。どうして、そんなことを？」

「だって……あたし、マ、ママやくるみより小さい……だからあつ」

途中で言葉を濁したお嬢様は、自らの嫉妬を恥じたのか横を向いてしまう。

そんないじらしい姿に紀洋はより愛しさを感じてしまった。

「俺は莉緒のおっぱい大好きだ。大きさだってちょうどいいし、感触も……とにかく、莉緒の全部が俺は好きで、好きで、たまらないんだよ！」

どれだけ言葉を尽くして訴えても、十年以上温めてきた愛を伝えきれない。そのもどかしさに背を押され、身体の奥深くに愛を伝えたいと抽送にスパートをかけていく。

ズップツ、ズリュツ、ズチュウウウツ！ ヌリュツ、又プルルツ！！

「ひいっ、はぁ、んんっ！ 奥にいつばいきてるうっ、オチンチンでえっ、し、子宮持ち上がる……あはっ、はんんっ！！ イイツ、紀洋、あたし、もおっ、ふぁああつ」

「ここもおっぱいも全部俺のものだ。今日、俺のものにするからっ……」

「うん、してえ……もおつ、あらひいつ、心も身体も全部紀洋のものおつ、そうして欲しいのおつ、はあつ、んんっ！　してえつ、もつと、もつとおつ！」

素直なおねだりの声に合わせて肉壁が断続的に締まる。

滲み出る愛液に屹立は余すところなく濡れ、その天然ローションのおかげできつい圧迫感を楽しみながらもピストンの速度を落とさずに済んだ。

ヌルヌルと表皮が蕩けていくような摩擦快感に、幹竿の痙攣が止まらなくなる。

「子宮、いっぱい突くっ……ここが気持ちいいんだよな？」

「うん、そこおつ、ああ、赤ちゃんできるところ、オチンチンでコンコン……はふつ、あああつ！　しゅごおつ、もおつ、イツ……クツ、くふううっ!!」

紀洋の問いかけに答える声が、次第に高く上擦ってきた。

シーツの上で背筋を熱く震わせ、細められたブラウンの瞳もどこか遠くを見るような恍惚としたものに変わってきている。

何よりも膣道全体がさつきよりも一回りほど狭まり、肉槍を根元まで啜えて放したくないと強烈におねだりしてきた。

愛しいお嬢様が自分を求めてくれている。そんな精神的な喜びと幹竿がしゃぶられるような強い刺激が最高に気持ちがいい。

「莉緒のオマ○コ、また締まって……やばっ、お、俺ももう……っ」

密着する膣壁に負けないくらい幹竿が痙攣し、芯を走る甘美な痺れが脳天にまで響いて

きている。もう視界も揺らぐほどの射精衝動を我慢するのも限界だった。

それでも最後にもう一度、はつきり気持ちを訴えたい。

紀洋は歯を食い縛って射精を堪えつつ、乳房から手を離して許可証を拾い上げた。

「俺も……くっ、り、莉緒、もう一つ命令だ！俺、本当に出す……莉緒の子宮に精液出すから!!俺の赤ちゃん孕んで、産んでくれ!」

普通なら決して言えない照れくさく過激なお願ひも、この『言いなり許可証』に背を押してもらうことで素直に口にできた。

小刻みなピストンで震える膣奥を執拗に突き、莉緒の返事を促す。

「うんっ、はあ、う、産むうっ……あらひいつ、の、紀洋の赤ちゃん産む、産みたいよお……きてっ、はあっ、いっぱい熱いのっ、あたしの子宮に精液、紀洋の精液ドクドクして……ふあっ、イクッ、もっ、んんっ、イツ……イクウウッ!」

強い意志を感じさせる短い間隔のピストンに悶えながら、蕩け顔のお嬢様が少年の言葉に応えて叫ぶ。

その瞬間、波打つ肉壁が屹立を搾るように力強く狭まった。

とつくに限界を超えて気力だけで堪えていた少年には耐えがたい刺激。蕩け火照る膣内で剛直が爆発してしまいそうな快感で一瞬意識が吹き飛んでしまう。

「出るっ、出るよ、莉緒！好きだ……イクッ、あああっ!!」  
ビュクウッ、ビュルルッ、ビュプッ、ビュブブプッ!



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**



竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

**二次元  
ドリーム文庫**

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

**二次元  
ドリームノベルズ**

サイズ:新書

※二次元ドリームノベルズは、全編の方向性まできまっています。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

**リアルドリーム文庫**

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

**あとみっく文庫**

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



**ヴァルキリー**



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

**cranberry**



<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元  
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!